

インド行きを断念
星尾遺跡

釈迦への強い信仰を持ち続けた明恵上人は、釈迦の生まれしたインドへの強い憧れを持ち続けていました。上人は、二度にわたってインド行きを計画しましたが、最初にインド行きを計画し、春日明神のお告げにより断念することになった舞台が星尾屋敷（有田市星尾）です。星尾屋敷は、現在の神光寺周辺にあったと考えられ、上人を深く信仰していた湯浅宗光とその子孫が本拠とした拠点でした。

建仁2年（1202年）の冬、明恵上人は星尾屋敷の近くに庵室を移します。上人は、翌年の1月に釈迦の遺跡を巡礼するために、インドへ渡る計画を弟子たちに打ち明けます。すると、宗光の妻が尋常ではない様子となり、春日明神が乗り移ります。宗光の妻の体を借りた春日明神は、上人に対し、自分があなたを守護してきた養育の父であり、インドへ渡ろうとすることは嘆かわしいことだと、日本にとどまることを求めます。上人は、春日明神の願いを受け、長年思い続けたインド行きを断念します。明恵上人の伝記である「行状記」には、その場集まった70〜80人の人々が涙を流して上人と春日明

神のやりとりを見守ったと記録されています。

明恵上人が初めてインド行きを計画し、断念した場所は、神光寺の西側にあり、石造の卒塔婆が建てられ、星尾遺跡として国の史跡に指定されています。（写真）

一度目のインド行きを断念してから2年後の元久2年（1205年）、明恵上人は再びインド行きを計画します。このときは、インドまでの距離や日数まで計算した旅程表を作成するなど入念な準備をして、弟子たちと相談をしていたところ、上人は重病に陥り、苦痛に襲われるようになります。これも春日明神のお告げかと疑った上人は、インド行きの可否を問うために、くじ引きを行います。「インドへ渡るべし」と「インドへ渡るべからず」という二種類のくじを置き、上人と弟子が引いたところ、全て「渡るべからず」という結果であったことから、泣く泣くインド行きを諦めました。すると、病気はたちまち治ったと伝えられています。

二度目のインド行きを計画したのは、明恵上人を支援していた宮原宗貞の屋敷（有田市宮原）で、その場所は田満寺の北側辺りにあったと推測されています。

